

報告 2

地域を股にかける人々を比較して — レバノン・シリア移民研究の地平 —

黒木 英充

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)



○宇山智彦 それでは2つ目の報告に移らせていただきます。報告者は黒木英充先生です。黒木先生は東京大学教養学部および大学院で学ばれて、東京大学助手を経て東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）にお勤めです。専門は中東地域研究、東アラブ近代史で、特にレバノン、シリアについてお詳しく、ご存じのように今シリア情勢が非常に緊迫しておりますので、今回もシリア情勢に関するメディアでの解説などで大変お忙しい中、ご報告を無理にお願いすることになってしまいました。今日はそのシリア、レバノンから特に外の地域に出ていった移民を鍵として、比較研究の視点を出していただくということになるかと思います。それでは黒木先生、よろしく申し上げます。

○黒木英充（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授） ただ今ご紹介にあずかりました黒木です。AA研も先生ではなくて、「さん」で呼ぶことになっていますので、そうさせていただきます。藤原さんからは非常に本格的な比較研究のお話を伺いましたし、この後の田畑さんからも伺えると思うのですが、その合間に少し肩の力を抜いて、お話を聞いていただければと思います。

実は今、藤原さんのお話を伺いながら、私も第一次世界大戦についていろいろ考えておりました。現在進行中のシリアの内戦は、いわば第一次世界大戦からの100年のツケを今払っているという性格があるんですね。そういう意味で、実はレバノン内戦とシリア内戦の比較という話をした方がよかったのかと、今になって考えておりました。

また、AA研はレバノンのベイルートに現地研究拠点として小さな事務所を持っておりますが、そこで研究所のプロジェクトを国際共同研究という形で、中東の都市研究をテーマに行っております⁴。Google Maps と古地図を重ね合わせて、道具立てを作りながら研究を進めています。いろいろな共通項を設定して比較も行おうとしているのですが、まだ「比較研究」ということでまとまったお話はできませんので、今日はこの移民の話をさせていただきます。

最初の写真【図1】ですが、これはロンドンのナイツブリッジにハロッズという有名なデパートがありますが、そのフードコートの中の「回転レバノン料理屋」というべきものです。回転寿司のようにレバノン料理が回ってくるのですが、皿の色ごとに値段が設定されていたり、ガリの代わりにオリーブが置いてあったりという、そういうところも食文化がグローバル化している1つの表れかと思



図1 ロンドン・ナイツブリッジのハロッズフードコート内の回転レバノン料理 2009年

⁴ AA研の中東研究に関しては、ウェブサイト「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」<<http://meis2.aacore.jp>>参照。

ます。

今日のお話は、3つの部分に分けていたします。最初は前提的なお話、それからレバノン・シリア移民の特徴、それから比較研究です。今もお話がございました「愉しみ」にまではなかなか至りませんが、もうここ数日七転八倒しておりましたが、比較の試みも少し挑戦



図2 Gabriel Farry と Jamelie Coory の結婚式、ダニーデン、NZ、1899年。北レバノン・プシャッレ生まれの Gabriel はこの結婚までにメルボルンとダニーデンで8-9年間、行商人として働いた。

D. Page & J. Farry, *The Hawkers: A Family History, Dunedin, 2nd ed.*, 2010.

ちかということ、レバノンの現在の政治家の代表的な人々をピックアップして載せてみました。こんな人たちだということです。

9人載せましたのは、この人を載せたらこの人も挙げなければ、という形で、イスラーム教徒を挙げたら、キリスト教徒も、という具合にレバノンはこのバランスが問題なのです。真ん中の一番上が現大統領でマロン派、その下の人もマロン派キリスト教徒ですが、レバノン内戦末期の指導者の1人で、その後フランスに15年ほど亡命してから帰国、大統領の座を狙いながら果たせないでいる人です。

真ん中の左側、これはヒズボラのハサン・ナスラッラーさんで、今レバノンで一番力を持って影響力のある人です。この人がテレビで何か演説をするというと、賛同者・反対者含めておそらく国民の9割ぐらいはテレビの前に座って、この人の言うことを一言も聞き漏らすまいと耳を傾ける、という具合です。

してみたいと思った次第です。

この写真【図2】はちょうどレバノン・シリア移民が世界各地に拡散していた時期の19世紀末で、ニュージーランドでの結婚式の写真です。

それから、いきなり人の顔がたくさん出てきますが【図3】、これは何かというと、皆さん、レバノン人とかシリア人たちと直接会われたり、お話しされたりしたことはあまりない方が多いかと思ひまして、どんな人た



図3

男ばかりではいけませんので女性もということで【図 4】、右下はバヒーヤ・ハリリーさんという政治家でして、前の左下のハリリーさん これは前首相で、2005年に爆弾で暗殺されたお父さんも首相を務めた人です の叔母さんに当たる方です。



映画監督・女優 ナディーン・ラバキ



歌手 フェイルーズ



歌手 マージダ・ルーミー



国会議員 バヒーヤ・ハリリー

図 4

あと芸能関係では、私の趣味も少し含めていまして、この左下のマージダ・ルーミーさんは、多分 20 年ぐらい前の写真かと思いますが、載せさせていただきました。右上のフェイルーズさんは、これはもう全アラブ世界に知れ渡る、アラブの歌手といえばフェイルーズという、アラブ人で知らない人はいない歌手です。もうだいぶお年を召していますが、まだ現役で時々歌っていらっやいます。

こういう人たちの顔をイメージに留めていただいて、これから研究の話ですが、移民研究は最近いろいろなところで行われております。「グローバル化」の中で大規模な人口移動があり、これをいろいろな研究分野で問題にせざるを得ない状況があると思います。さまざまな分野 政治学なり、社会学なり、人類学、経済学、歴史学など、いろいろなところで移民が問題とされています。

私は研究の手法としては歴史学を主にして、そちらの方から地域研究ということを考えてまいりましたので、歴史学にとってこの移民研究はどういう意味があるか、あるいはどういう点でチャレンジングかという話になります。今まで歴史研究は、長らく伝統的にいわゆる一国史といいますが、ある国の歴史、成り立ちを過去にさかのぼって時系列的に研究し、説明していくというものであったわけですが、そういうものの限界や問題点が指摘されるようになりました。一国を超えるより広い地域とか、民俗、文化とかを対象にした歴史が発展してきました。あるいは国家よりもずっと小さな集団や個人などを対象にした

ミクロの歴史ですね。

そういう際に、人間の移動というものに関しては、有名なところで後の時代を大きく規定するような民族移動といいたいでしょうか、ゲルマン民族やトルコ民族の移動、あるいはモンゴルの移動に関わる研究は、かねてより注目されて研究されてきました。

それから、商業民のディアスポラといわれる人たちの研究が、これも過去 30 年ぐらいの間、いろいろなされてきております。新大陸の歴史を語る際の移民も研究されてきました。ただ、いずれの場合にも難しいといえますが非常にチャレンジングなのは、移民という主体が動くということです。しかも国を越えて動く。広大な空間の中を動くものというのはだいたい捉えるのが非常に難しいものです。

国民国家の枠を超えて動いた人々は、まさに動くことによってそこで新たな空間を獲得します。ですからそれを相手にする際には、研究者は常に全体を見渡す、鳥瞰的である必要があると同時に、移民それぞれの立場に寄り添って、虫瞰的に、人々の視点から見上げて見直す必要もあると思うのです。

それから移民自体が動き、当然そこで言語も変わりますので、多言語環境が問題になります。となると、研究者もこの多言語を相手にしないといけなくなります。さらに、先ほど少し申しましたが、文化的環境に加えて政治的・経済的・社会的環境も変わることで、いろいろな問題が複合し、多面化するために、マルチ・ディシプリナリーなアプローチが要求されることになります。

このように、移民が動いて、そこに定着して子孫を作っていくと、その経験や記憶が時間の経過とともにいろいろな層を成してきます。つまり、移民が獲得する空間そのものが多層性を帯びていること、さまざまなレイヤーを移民に応じてこちらも観察し、研究対象としなければいけないことから、研究者は常に多正面作戦を強いられます。第一次世界大戦における戦闘の前方、後方の問題でもありませんが、とにかく考えだすと厄介なことばかりが出てくるわけです。



図 5 カナダ・モントリオールのレバノン移民記念碑 フェニキア文字、フェニキア人の船のオール、レバノン杉

そうなりますと、どうしても個人では難しいので、共同研究がここで有効になってきます。レバノン・シリア移民の調査に関しては、科研費で海外調査の予算をいただいております。何とか今2期目をやっている最中です。

お見せしている写真は、私がモントリオールを訪れた際、市の公園にレバノン移民の記念碑が最近作られたというので、案内してもらったものです【図5】。レバノン移民については、フェニキア人が常に代表的なイメージとして使われます。フェニキア人が地中海に植民市をつくって活躍したのは紀元前1000年ごろの話ですから、非常に古い。たとえばイスラームが生まれた7世紀よりずっと以前なので、それを強調することは政治的な色彩を帯びることになります。

この2人のおじさん、だいたい私と同じぐらいの年齢の人ですけれども、レバノン内戦(1975-90年)の頃はカラシニコフをもって実際に戦闘に参加していたそうです。それが1990年に内戦が終わってシリア軍が駐留し始めたので、いられなくなって国を後にした。右側の人はアイスクリーム屋さんをやっています、カナダでアイスクリームは夏しか売れないというので、ちょうど書き入れ時なのに、忙しい中を付き合ってくれました。ただアイスクリーム屋さんといっても、実は国際的に展開しているチェーン店で、仕事でフィリピンや香港に行ったことがあると言っていました。私を車に乗せて運転しながら、口元に取り付けた電話のマイクで常にしゃべっているのですが、話を聞いていると、「いや、その何万ドルはキプロスに投資しちゃだめだ、モロッコに投資しろ」とか言っている。私を案内してモントリオールのレバノン移民の生活を説明してくれながら、頭の中では内戦末期のレバノン社会の記憶や、現在のレバノンの政治状況がうごめき、資本金が地中海を飛び回っている。常にそういう形で、レイヤーが激しく動いているということですね。

それで今日の比較研究の話ですが、これは移民研究として行くと非常に難しいことがよくわかりました。移民たち自身、生活実践の中で常に「比較」という行為をしていますし、研究者もしているのですが、あまりにもいろいろあり過ぎて、しかも自分の力が追いついていかない、これが七転八倒の理由だったわけです。例えば、移民の故地の文化と移住先社会の文化の比較とか、異なる移民集団が移住先でどのように適応しているかの比較とか、あるいは、ある国と別の国との間で移民をどのように受け入れているか、という比較。あるいは、ある移民が定着した当初と、それから世代を経た後、社会的地位や文化はどのように変化したのか、そういったいろいろな比較が可能だと思います。今日はレバノン・シリア移民に関して「白人性」なるものを軸にして、比較の試みをしたいと思います。まずはレバノン・シリア移民とはいかなるものなのかを、かいつまんでお話ししたいと思います。

また人の顔が出てきましたが、何が特徴かということ、とにかく目立つということ【図6】。ここでも有名人を挙げましたが、左上のお方は皆さんご存知ですね。上段真ん中の方、カルロス・スリムは世界一の大金持ちで、ビル・ゲイツといつても『フォーブス』誌上で富豪世界一を争うという人です。メキシコのメディア王として出発して、今やニューヨー

クタイムズも所有し、いろいろ複合的にやっておられます。右の方、スティーヴ・ジョブズさんも皆さんご存じと思いますが、この方は生みの父がシリア人で、シリア系 2 世といえます。



**Carlos Ghosn, 日産
CEO ブラジルで 3 世**



**Carlos Slim, 富豪世界一
メキシコで 2 世**



**Steve Jobs, アップル創業者
アメリカで 2 世**



**Paul Orfali, Fedex Kinko's
創業者。アメリカで 2 世**



**Jacques Nasser, Ford Europe
CEO 等。オーストラリア等で 1 世**



**Ray Lahoud, アメリカ運輸長官
アメリカで 3 世**

図 6

ポール・オルファリーは、コピー・製本の会社キンコーズの創業者。私も科研費の報告書の製本などでお世話になっているところです。この人もやはり 2 世で、もともとシリアから来たレバノン系。彼の親戚が書いた自伝に登場するのですが、カリフォルニアの大学での学生時代、本を読むのは嫌いだったそうですが、大学図書館のコピー機が壊れたというので学生が右往左往しているときに、大学の門の近くにとどこからコピー機をレンタルして運んできて即席のコピー屋を開業、学生が喜んだというところからこの商売が始まったそうです。本は読むものではなくコピーするものだというのがこの人の話らしいですが。真ん中のジャック・ナセルは、私も今回いろいろネットで探しているうちに分かった人ですが、フォードとかいろいろな会社の重役をやっている人で、1 世です。レバノンではバスの運転手をやっていたのが、海外に出て、1 代にしてこういう立場に上り詰めたのです。実業界のことばかり申しましたが、政界にいきましたと、右下のレイ・ラフド。これはかつ

てトヨタのリコール問題のときの写真で、右側に写っている人はトヨタの社長です。トヨタに怖がられた運輸長官で、レバノン系 3 世です。

政界の続きですが【図 7】、左上の人がラルフ・ネーダー、アラビア語でいうと「ナーデル」ですが、アメリカの万年大統領候補で、いつも民主党の票を食うと嫌がられている人です。上段真ん中が、かつてアルゼンチンの大統領をしていたカルロス・メネム、右は元コロンビア大統領のトゥルバイ。それから左下の写真ですが、右側の方は皆さんよくご存じの、故エドワード・ケネディ上院議員ですが、その奥さんがレバノン系 2 世です。奥さんだから何だとおっしゃるかもしれませんが、アメリカではケネディ家に入るといのは大変なステータスなのです。



Ralph Nader, 市民運動家、大統領候補、アメリカで 2 世



Carlos Menem, 元アルゼンチン大統領、2 世



Julio Cesar Turbay Ayala, 元コロンビア大統領、2 世



Victoria (Oreigi) Kennedy, Edward Kennedy 上院議員夫人、アメリカで 2 世



Michel Temer, ブラジル副大統領、3 世?



Paulo Maluf, 元サンパウロ市長、元サンパウロ州知事、ブラジルで 2 世

図 7

下段中央はブラジルのテメル副大統領です。それからやはりブラジルですが、サンパウロの市長とか州知事をやった人もレバノン系ですね。

今度は学者などの世界になります【図 8】。左上はアミン・マアルーフという、この人はフランスの作家ですが、ゴンクール賞という非常に権威ある文学賞を受賞していて、今は学士院会員になっています。真ん中のレイモンド・クーリーはミステリー作家で、レバ

ノンでの私の飲み友達の友達ですけれども、ハヤカワ文庫で4つぐらい小説が翻訳されています。非常に面白い歴史ミステリーを書いている人です。右上の、理研の野依先生と一緒に写っているのは、イリヤース・コーリーというノーベル化学賞受賞者です。

左下はシャキーラというポップスでは世界的に有名な歌手です。それからポール・アンカ、皆さんご存知の『マイウェイ』の歌手ですね。右下は世界的な心臓外科医だった故マイケル・ドゥベイキー、「神の手」といわれるような人物でした。



Amin Maalouf, 作家、ゴンクール賞受賞者。仏学士院会員、フランスで1世/3世



Raymond Khoury, ミステリー作家、イギリスで1世



Elias Corey, 有機化学者、ノーベル賞受賞者。理研名誉フェロー、アメリカで3世



Shakira, ポップス歌手
コロンビアで2世



Paul Anka, 歌手、カナダで2世



Michael DeBakey (Dabaghi), 心臓外科医、アメリカで2世

図 8

このように、とにかく目立つのです。今はいわゆる有名人をいくつか挙げただけですが、では、レバノン・シリア移民が世界にどのぐらいいるのかという話になると、これが難しいのです。先ほど藤原さんのお話にありましたように、統計のもつ一般的な問題があることに加えて、移民となると、とにかく全然分からない。あるサイトから1237万人という数字を持ってきましたが、これも確たるものではありません。諸説あり過ぎてどうにもなりません。研究者の中で一番少なく見積もる人は、せいぜい400万人だと言いますし、一

方、1200万人では足りないと言う人もいます。

このように幅があるのはいろいろな理由があります。まず一つには、世代を経てしまった人たちをどうとらえるのかという問題があります。それと、後で申しますが、シリア移民とレバノン移民、先ほどのネット情報ではレバノンのディアスポラと言っていますが、実はこれが分かれ難いところなのですね。「レバノン移民」と言いながらいつの間にかシリア移民も含めて「レバノン移民」と言っていて、逆にシリア側は「シリア移民」と言いながらレバノン移民も含めて話をしていることがあります。

ですので、あくまでも1つの傾向を読み取っていただくしかないのですが、移住先としてはラテンアメリカの比重が非常に高いです。それから合衆国を中心とした北米と、西アフリカのフランス語圏も非常に多い。それからオセアニアですね。最近では湾岸諸国にも多数入っています。

今度は時間的な傾向ですけれども、移民はだいたい19世紀の末から本格化します。そして第一次世界大戦期になると一時落ち込みますが、その後また少しずつ増えます。1940年代にシリアもレバノンも独立しますが、その後、もう一度移民が活発化する。そしてレバノンの内戦を通じて激増して、今はまたシリア内戦で難民という形で周辺国に200万人ほど出ている状況があります。

傾向としては、初期の移民は、ラテンアメリカや北アメリカに多く出ていったけれども、内戦以降これが多様化するということです。特にラテンアメリカへの移住者は内戦期以降減っていくのですね。その代わりにアメリカ合衆国やカナダ、ヨーロッパなどが増えていきます。あと湾岸諸国にも石油産業の労働力が必要なものですから多数出ていくわけです。

行ったきりではなく帰ってくる移民もいまして、そういったところで少しインタビュー調査をしたことがあります【図9】。これはレバノンのベカー高原という農村地帯で、一般的には貧しい地域です。貧しい地域に突如こういう御殿が続々と建ち並ぶ地区が出てくるのですが、これは帰還移民のものです。何人かと会って話を聞いたのですが、うち2人の写真を出しました。カナダでレバノン料理のレストランを経営する人と、ベネズエラでブティックを経営する人です。内戦が終わったとき仕事がなかったので、仕方なく出ていったという人たちが、20年余りでこうなるわけですね。レバノンは、物価は決して安くありません。バイルートで生活すると、東京とだいたい同じ物価感覚です。そこでこういう家を造るには、日本円にすると何億円というお金が必要になります。それを1代でやってしまう。特に右側の人は最初ベネズエラでは、地面にビニールシートを敷いて、そこにライターや靴下を並べて売るところから始めた。警察が来るとそれをまとめて逃げるといって、そんな生活から始めて、1代にしてこういう家を造って、周りに素晴らしい庭があって、後ろの方には果樹園が段々畑になっている、そういうものができてしまうわけですね。こういう人たちです。



レバノン・ベカー高原南部の帰還移民（1980年代に移民、2000年代に帰還）カナダ・カルガリーでレバノンレストラン経営



ベネズエラ・カラカスでブティック経営

図 9

では、移民がどのように出ていったかということですが、19世紀末の、初期の移民に注目したいと思います。最初に出ていった人たちが各地で生活の基盤を作って、それが2世、3世の活躍する基礎を作ったわけです。

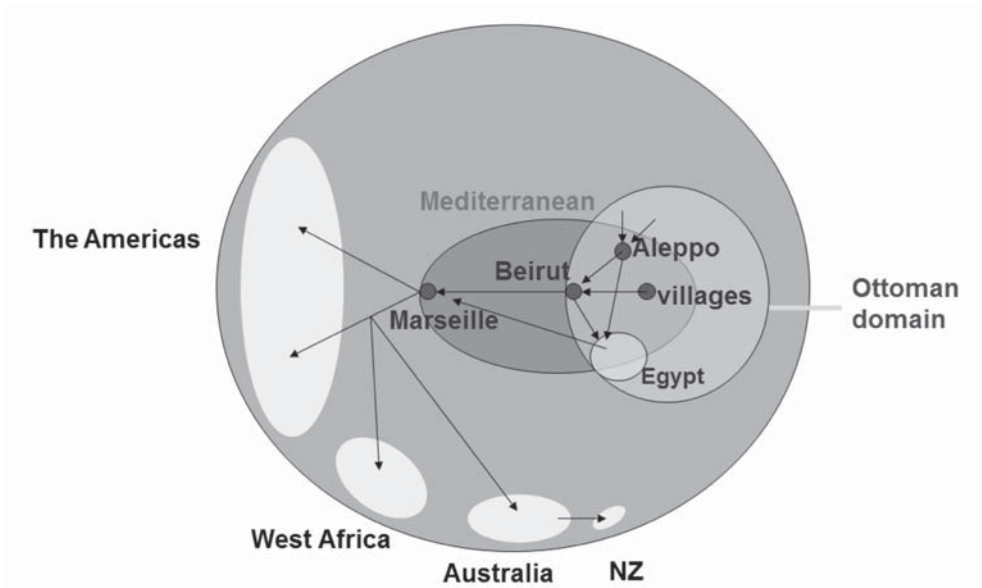


図 10 19世紀末からの移民の移動経路

【図 10】は模式的に書いたものですが、レバノンやシリアから出ていくときは、だいたいベイルートの港から船で出て行きます。フランスが第一次大戦後に委任統治で、だいたい今のレバノンの国境線を作りましたが、その前のオスマン帝国時代にはレバノンの山地は、これより一回り小さい、海の方の半分ぐらいしかないような場所でした。

そういった山の中から、また後背地のアレppo、ホムス、ハマーといった内陸部の中核都市の周辺の農村から、人々がベイルートに行き、そこで船に乗ってマルセイユに行く。マルセイユから鉄道で大西洋岸に出るなど、いろいろルートはあったようですが、多くはマルセイユで船を乗り換えて大西洋航路に出て、アメリカに行ったり、アメリカに行くつもりが下りてみたらダカールだったとか、シドニーだったとか、あるいは南アフリカにも行きますが、そうやって各地に散っていったわけです。

そしてオーストラリアからさらにニュージーランドへ、あるいはフィリピンまで行きます。フィリピンにも現在 1000 人単位のレバノン系人がいまして、在京のレバノン大使はフィリピンも一緒に管轄して、定期的にフィリピンにも行くそうです。

先ほどレバノン移民とシリア移民、お互いに他方のことを含んでいると申しましたが、これはオスマン帝国時代から第一次世界大戦にかけての時期の地域認識のあり方が絡んできます。つまり、この時期に移民した人たちは、オスマン帝国臣民としてオスマン帝国のパスポートを持っていきました。そうすると、行った先では「トルコ人」と呼ばれたのです。すると、レバノン人もシリア人も、「違う、自分たちはアラブであってトルコではない」と言うのですが、なかなか定着しなかった。しかしずっと主張していると、「シリア人」とか「レバノン人」という名前をだんだん認識してもらえるようになった。パワーポイントの資料には移民が多数出ている時期のベイルートのフランス総領事の報告を載せましたが、時間がなくて省きます。

先ほど申しました通り、移住先で有名人が次々と輩出するように、移民は急速に経済的な成功、上昇を遂げていきます。これはブラジルにおいて特に顕著ですが、最初は行商人です。アメリカ合衆国でも、メキシコでも、ブラジルでも、オーストラリアでも、ニュージーランドでもみんな、行商人をやるんですね。全員が全員ということではありませんが、まず「レバノン・シリア移民といえば行商人」というイメージが各地で定着する。移住先は相互に数千キロ離れていながら、みんな船を下りると行商人から始めたのです。

行商人というのは、資本がなくてもできる、最初にできる仕事です。そこからお金をためて、後から来た行商人を束ねていく。特にブラジルでは行商をしながら信用売買を各地で定着させていく。それまでレバノン・シリア移民が来る前、ブラジルにはこういう信用売買は存在していなかったそうで、これは実に画期的だったのです。3代目になると、もう大都市に商店を構えて、不動産投資をするようになっていきます。

また、開拓地のレバノン系行商人は、散在している農場をつなぐ役割も果たします。こうしたビジネスの競争相手は誰かという、東欧出身のユダヤ系移民で、同じような商売

をして、ライバル関係にありました。

白人性の話に急いで移ると、取りあえず主要な移民先として、ブラジルと、アメリカ合衆国、オーストラリア、3つ比較の材料として考えてみたいと思います。

	ブラジル	アメリカ合衆国	オーストラリア
人口(概数)	2億人	3億人	2000万人
レバノン・シリア移民とその子孫人口	800万人 (誇大か)	330万人 (誇大か)	25.5万人 (オーストラリア統計局08年)
日系人口	150万人	120万人	4万人
独立	1822年 ポルトガル	1776年 イギリス	1901年 イギリス
先住民対応	包摂	殲滅	殲滅
黒人奴隷	導入	導入	なし
レバノン・シリア系の分布	サンパウロ中心に全国に拡散	NYなど東海岸中心、西海岸、南部も	ほぼ全てシドニー、メルボルンと周辺

表1 移住先地域における「白人性」というプリズム

ここに国の人口と、レバノン・シリア移民がどのぐらいいるかが示されています。例えば、これは誇大に決まっているのですが、ブラジルに800万人というのは、現地に行つて関係者やレバノン移民の人と話をし、どのぐらいいますかと聞くと、だいたいこの数字が出てきます。オーストラリアだけは一応統計局が2008年に25.5万人という数字を出しています。オーストラリアは、国の人口自体も少ないわけですね。参考までに日系人の推定人口も挙げておきました。先住民への対応とか、黒人奴隷の問題は飛ばします。これは皆さんよくご存じのところだと思います。

ブラジルに移住した人々に最初の段階でどういうことが起こるかということ、レバノン・シリア系の移民の大半はキリスト教徒、アラブ・クリスチャンでした。そういう意味ではブラジルの、それまでポルトガル人が中心になって作ってきた社会としては非常に受け入れやすかったのですが、しかしこの人たちは果たして「白人」なのか、という問題がありました。黒人でも黄色人でもないことは確かだが、果たして白人とってよいのか。しかも、ポルトガル語を話すけれども、彼ら同士ではいつまでもアラビア語をしゃべっている。なかなか同化しない。こういう人をどうしたらいいのか、各地で当惑が生まれたわけです。

その際には、ヨーロッパによく見られたいわゆるオリエンタリズム的な偏見に満ちたこともいろいろ言われたのですが、本国のポルトガルで19世紀後半に、後に大統領も務めたテオフィロ・ブラガという学者がポルトガル人やイベリア半島の人たちのルーツ・性格について唱えた説が注目されました。これは、「モサラベ」 これはアラビア語の「ムスタ



図 11 1922 年「独立百周年記念シリア・レバノン人委員会」による「シリア・レバノン人の友情」像、1928 年除幕。上部：ブラジルの栄光の女性、純粋なシリアの乙女、ブラジルの兄たる先住民戦士。中段：フェニキア人の舟

ウリブ」という言葉からきていますが、と呼ばれるアラブ・クリスチャンが、ウマイヤ朝の時代からずっとイベリア半島に長く暮らしていて、もちろんレコンキスタで駆逐されたり改宗を強制されたりと、いろいろな問題がありますが、しかし、数世紀にわたって共存してきた記憶があって、このことからポルトガル人やスペイン人らイベリア半島の人々の中にはアラブ人と共通の性格があるという話だったのです。イベリア半島の人々の人種をどうとらえるか、という議論の中でこれが出てきたのです。

今度はブラジル人がその人種論を輸入して、ブラジル人の中に、実は「モサラベ＝アラブ・クリスチャン」的な性格とか、ポルトガル人の性格とか、アジア的な性格とか、とにかく何でもあるのだ、という非常に包摂的な考え方が生まれました。これはレバノン・シリア系の移民にとって都合がよかった。左側の写真は、ブラジルの独立 100 周年を記念して作られた像ですが、そこにもシリア・レバノン人と先住民、そしてブラジル

人の 3 人がてっぺんにいて、お互いに仲良くしているという構図です【図 11】。



図 12 「レバノン山地クラブ」 サンパウロ中心部 2010 年撮影

もちろんこういった包摂的な考え方に対し、常に反動・反発もあって、ドイツの優生学の影響を受けた意見もあったのですが、しかし包摂派が優勢になる。こういった形で、レバノン・シリア系はブラジル社会の中に居場所を見つけて活躍するようになってきます。

その象徴の1つがこれです【図 12】。サンパウロの街のど真ん中、東京でいうと赤坂といった感じのところに、東京外国語大学の数倍はある敷地　北海道大学のキャンパスよりは小さいかもしれませんが　そのぐらいの敷地を持った「レバノン山地クラブ」という同郷者クラブがあります。そこにはジムとかプールとか運動場、レストランとかがあって、地下駐車場は 800 台収容です。サンパウロには日系人組織の本部ビルもありますが、これと比べたら天と地の差です。これはサンパウロ市内に数十あるレバノン・シリア系クラブのうちの 1 つで、最大のもので、ほかにも銀座のような一等地に大きなビルを持っていたりとか、いろいろなものがあります。

今度は大急ぎでアメリカです。アメリカの人種問題については私が改めてお話しするようなことはありませんが、20 世紀初めに移民が中欧や東欧、南欧からどっと押し寄せてくるので、これを規制しなければいけないという動きが出てきます。その中で、とにかく白人か黒人か、アフリカ出身か、帰化をどのように認めるか、市民権をどのように与えるかということが問題になります。後で、中国系や日系というアジア系が新たなもう 1 つの枠組みとして作り出されますが、当初は白人か黒人かの二者択一でした。

このときにレバノン・シリア系移民は、「お前たちは、色は白いけれども白人とは異なる」という立場に置かれるわけですね。逆に言うと、レバノン・シリア系にとっては、いかに自分たちの白人性、whiteness を主張してこれを承認させるか、裁判の場で認めさせるかが大事になります。

その当時の人種論では、「コーカソイド」というものが重要でした。ヨーロッパ人たちは要するに、自分たちはコーカサス系、コーカソイドであると言うわけですね。そうすると、シリア人・レバノン人は、「コーカサスはすぐ近所だ、自分たちこそコーカサス系だ」と主張する。そして「キリスト教徒でないといけない」と言われたら、「自分たちはクリスチャンである。東方キリスト教であって、そもそもイエス・キリストは自分たちの住んでいるすぐ近くに生きていた」という。そうすると、「でもお前たちが住んでいたところはアジアだろう」といわれて、いろいろ難癖をつけられるのですが、しかし 1909 年にはちゃんと白人として認定されることになります。

この背景には、レバノン・シリア系がアメリカなり中南米なりでアラビア語の新聞を多数発行して相互に情報を共有する形があったとか、いわゆるベネディクト・アンダーソンの「遠隔地ナショナリズム」の典型ですが、アメリカ大陸にしながら本国のオスマン帝国におけるアラブ・ナショナリズムを支援するとかいう動きがあった。そういったことも、人々が白人性を獲得するために団結する、ということを生み出したと言えます。ただ、アメリカでは、皆さんご存じの通り、9.11 事件の後ますます強くなりましたが、常にアラブ、イスラームという枠の中にレバノン・シリア系が位置付けられて問題になる、ということ

があります。

それがもっと激しく、厳しく出てきているのがオーストラリアの場合です。ちょっとスキップしますが、結局この国の中に黒人奴隷がいなかったということもあって、「白豪主義」といわれるように白人の社会が純粋に追求されてきたわけですね。ところが 1960 年代になって、それは人種主義だ、差別主義だと批判されて、方針が転換されます。しかしながら、オーストラリアの多文化主義は有名ではありますが、それでも結局白人性なるものは常に前提として措定されて、あくまでも白人的なるものの管理の下で多文化主義が追求されるということになります。これを完膚なきまでに描いたのが、日本語に翻訳されておりますが、ガッサン・ハージの『ホワイト・ネイション』という本です。この人自身がレバノン系 1 世です。

オーストラリアでは今現在、レバノン系、シリア系のイスラーム教徒がたくさん移住するようになってきていまして、この環境の中でヘイトクライムなどが頻発しています。レバノン系というと、オーストラリアではちょっと柄の悪い人たちのようなイメージが定着しています。先ほど申しましたように、恣意的なアジアとヨーロッパの境界線によって、ボスポラス海峡より東はアジアとされてしまったのです。「それはないでしょう」というのがレバノン・シリア系の言い分です。

取りあえず 3 つの事例を、駆け足で比較してみましたけれども、白人性という問題は、すなわちヨーロッパ人が自分たちをどう規定するかという問題であって、その際に他者をどう置くかということなんですね。そこにレバノン・シリア系が、何か扱いにくいものとして出現してくる、そしてそれを白人として認めていくけれども、認めながらも最後までそれを内部化しないのがオーストラリアであるという言い方ができましようか。

ブラジルの場合はイベリア半島における歴史的経験からして、彼らはもう完全に今、ブラジルの一部と言いますか、「貴族化」と書きましたけれども、社会のトップの階層になっているわけです。つまり、レバノン・シリア系であるということに誇りを持って、エスニシティを主張するような状況になってきているのです。

雑駁なお話で恐縮ですが、つなぎの話としてお聞きいただけたらありがたいと思います。最初にロンドンで始まりましたので、最後もイギリスです。2010 年にイギリス・レバノン協会創立 25 周年のパーティーにチャールズ皇太子が現れました。なぜ来たのかというと、ロンドンのレバノン系移民が作った本屋さんがありまして、そこでチャールズ皇太子のエッセー、いろいろなところで述べられたお言葉をまとめたものですが、それをアラビア語に翻訳して出版した。その出版記念パーティーも兼ねて、チャールズ皇太子を呼んでしまうわけです。このように、やるのが常に派手なレバノン人ということでもあります。すみません、時間が超過したと思います。以上です。(拍手)

○宇山智彦 黒木先生、どうもありがとうございました。移民は世界のいろいろな地域からいろいろな地域に行っていますので、それ自体、比較の研究対象として非常に好適なも

のです。白人性という話題が出ましたけれども、近年の帝国研究、植民地研究の中でも植民地に移住した白人が本国の白人と同じなのか、違うのかというような論点もあります。また個人的な関心から言えば、シリア人がコーカサスに近いということで白人性を主張したのと、現在のロシアでコーカサスの人々が「黒い連中」と呼ばれ差別されている状況との対比だとか、ロシアでは冬もアイスクリームが売れるけれど、カナダでは売れないのはなぜだろうとか、いろいろ比較の関心をそそられました。